

美人辨天・美人証明

美と健康・長命の
三願を叶う



美人辨天・美人証明

美と健康・長命の
三願を叶う



美人の国・足利は健康と長命と美しい町です。

美人の国・足利は

健康と長命と美しい町です。



目次

一、「足利の町」は、昔から美人の多い町といわれている――	4
二、「美人弁天・美人証明」とは―― ・美人弁天の副碑 心のやさしい「美人弁天のいわれ」――	6 10
三、「美人弁天のいわれ」を求めて―― ・弘法大師の伝説がある―― ・源氏にまつわる「明石姫」に喜びがこみあげる―― ・弁天様は運の強い開運の神様――	13 13 17 20
四、「美人の国・足利」は「美人のもと」―― ・それは「美人証明」です	24

「足利の町」は、昔から美人の多い町といわれている

『美人の国・足利』 美人辨天について

一、「足利の町」は、昔から美人の多い町といわれている

足利は昔から織物の町で、美人の多い町といわれていました。

「足利の町を訪ねれば、いにしえ忍ぶ東の京都」といわれ、西條八十作詞の「足利音頭」の中には、「足利来るなら織姫さまの…、嫁に持つなら、足利むすめ、肌はやんわり…」と歌われていることでも有名です。

歴史も古い足利市は、室町時代には、足利長尾氏が、初代長尾景人から六代目顕長まで一二〇余年の間、足利の地を統治していました。長尾氏は城の守護神として、弁天（弁財天）を心より敬い、城の周囲に七弁天を配神し、守兵で守らせていたとのこと。長尾氏が築いた両崖山の美しい山城には、清く、おいしい水が湧き出ていたとのこと。両

「足利の町」は、昔から美人の多い町といわれている

崖山のふもとには、とうとうと流れる清水（せいすい）が多く、その水を飲んでいた足利の女性たちは、自然に美しくなったといわれています。その後、北関東随一の寺社文化と織物産業の隆盛の中、豊かな足利の町で育つ女性は、働き者で、教養を備え、かつ洗練された身だしなみの美人として全国に知られるようになりました。

七福神唯一の女性である弁財天は、水を神格化した女神様です。とうとうと流れる川が、弁舌・音楽を連想させ、学問や芸術にわたり、さらに財福や智慧を与え、かつ寿命を延ばしてくれる女神として信仰を集めたのです。

この本城の地に、清泉の湧く池があり、そこに弁天様が祀られています。昔から「明石弁天祠」といわれ「足利の伝説」（台^{うてな} 一雄^{かずお}著）のそれは、それは美しい「明石姫」にまつわる「伝説の物語り」があるのです。

二、「美人弁天・美人証明」とは

足利の歴史を踏まえ、今、注目を集めているのが本城二丁目・厳島神社の「美人弁天」です。

祭神「市杵島姫命」いちきしまひめのみことの分身として、高さ一・二五メートルの金色の石像が、朱色の「六角の宮」に納められています。そのわきに琵琶を持った二体の「なで弁天」が祀られ、この三体で「日本唯一の美人弁天」と呼ばれ親しまれています。古来の歴史からも、厳島神社の「美人弁天」は、足利にふさわしい神様とも言えるでしょう。

厳島神社の「美人弁天」には、「水かけ弁天」もあり、「美人の国・足利」にふさわしい女性の神様です。美人弁天は「女性の心のやさしい姿」を表しています。決して顔・かたちの「きれいさ」とか「美しさ」だけではなく、個々の女性の心、内面からにじみ出る「健康と長命と美しさ」

をお護りくださるものです。

「美人弁天」に足を運ばれましたら、まず左手に小さな弁天さまが岩の上に座っていらっしやるのが目に留まります。「水かけ弁天」です。生命を育む「水のこころ」、これを弁財天の「みこころ」というのです。弁財天は「水のこころ」と「素直なこころ」で私たちの生命を生み、育



弁財天の「みこころ」「水かけ弁天」

てくれました。私たちの身体の八〇％は水分でできています。水のこころを大事にすることは、弁財天の「みこころ」であり、美人弁天の三願である「健康と長命と美」を保つことになるのです。心のやさしい「水かけ弁天」のご加護があなたにもそそがれますように。

「なで弁天」には、ご利益があります。ご参



弁財天に癒される「なで弁天」

拝の方々が、顔や胸や膝などを、なでている姿を見るといい顔をしています。女性には女性だけの、人には言えない歴史があり、悲しみも、苦しみも、幾年月を経て、今「なで弁天」の前で、心が癒されているようです。なでると癒しの効果があるようです。心身ともに緊張がほぐれ、免疫力が高まるといわれます。

神様は福の神です。お参りする人が多くなるほど、神様は喜んでくれます。

「美人証明」は、「健康・長命・美」のシンボル（お守り）です。参拝されるすべての方々に「美人弁天」のご加護がありますようにと、願いを込めて差し上げています。

「美人証明は、ここにしかない日本唯一の美人証明」です。この「美人証明」は、美人弁天の三つの願いが叶うことはもちろん、ご主人から奥様へ、お子様からお母さんへ、おばあちゃんへ、日頃の感謝の気持ちを伝えることができる、有難いお守りです。また、男性から恋人へ、名刺代わりや、贈り物に添える等々、「美人証明」の魅力はたくさんあります。

『「うちの母ちゃん美人だよ!」と、うちの主人が言って、私にくれた「美人証明」。お世辞にも美人といえない私ですが、うちの人から「証明された美人」だと思ふと、嬉しくなつてしまいました!』

「美人弁天」は美人の聖地かも知れません。「美人弁天」の前では、普段言えないコトバ、「愛してるよ!」「美人だよ!」・「感謝してるよ!」「ありがとう!」など素直な心で、そつと語り合えます。

「美人弁天」は女性の神様です。「美人証明」は美人弁天の「みころ」なのかも知れません。

心のやさしい

「美人弁天のいわれ」

『本城の地に住む八重は、短命の家系に生まれ、自分の家にまつわる言い伝えに悩み苦しみ、悲嘆にくれていました。十八歳を過ぎたある日、旅の先達様が通りかかり、お茶を一杯出しながら、身の上話をしました。先達様は「この地に清泉の湧く池があり、そこに弁天様が祀られています。この弁天様に百日お参りすれば、あなたの人生はきっと変わりますよ」と言い残して旅立っていかれました。

八重は、先達様の言葉を信じ、毎日毎日、弁天様に心を込めて、一心に祈りを続けました。お参りをしてちやうど百日目、一人の若者に出会い、夫婦になりました。七人の子宝にも恵まれ、先達様が言われたように八重の人生は変わりました。

弁天様のご加護のもと、世の悲しみも苦しきも越えて、幾年月を経て、八重は多くの孫たちにも囲まれ、「健康」にも恵まれ、楽しく豊かな人生を送ることができました。悩み苦しんだ短命の言い伝えは八重の代で終止符を打ち、「長命」を授かりました。八重は幸せの中で「美しい」人生を送り、百二歳の天寿を全うしました。そして、弁天様の「護符を胸に」在世に感謝しつつ、八重は「花鳥の黄泉の国」へと旅立ちました。』

誰でも「過去と他人は変えられない」。しかし、「自分と未来は変えられる」といわれます。未来に「夢と希望」を持ち「努力（祈り）」をしていくと「奇跡」が起きるのです。弁天様は、八重に「健康」「長命」「美」を授けて下さったのです。本城二丁目「厳島神社・明石弁天」は、心の美しい「美人弁天」です。「健康」「長命」「美」こそ、女性の一生の願いです。それが「美人弁天のいわれ」になったのです。

次の「美人弁天のいわれを求めて」は「奇跡の物語」です。



大勢の参拝者で賑わう「厳島神社・明石弁天」

「美人弁天のいわれ」を求めて 弘法大師の伝説がある

三、「美人弁天のいわれ」を求めて

—弘法大師の伝説がある—

「美人弁天」の副碑として、「美人弁天のいわれ」をつくるにあたり、厳島神社の歴史や伝説、伝承などを郷土歴史家の方々へ尋ね歩きました。その時、はじめて「足利の伝説」(台 うてな 一雄著 かずお)に巡り合うことができませんでした。足利の私たちの祖先が語り、伝承して今日に至ったものでした。著者がよくこれだけ歩き、情報を知り、人と出逢い、広く深く聞きとり、苦勞をしながら「足利の伝説」としてまとめたことに感銘しました。

その中に、古くから伝えられている弁財天の一つ、「名草弁天」のことが書かれていました。それが非常に参考になりました。「足利の伝説」(台 一雄著)二十三話の中で「名草の弁天さま」—白い大蛇が道案内—がでできます。次のような内容です。

「美人弁天のいわれ」を求めて 弘法大師の伝説がある

『弘法大師に関する伝説は、全国数多くあり、足利にも幾つか残されています。これもその一つで、昭和十四年に国から天然記念物に指定された“名草巨石群”を境内に持つ「弁天さま」（現在は厳島神社）の創建にまつわるものです。

平安朝のころ、弘法大師（空海Ⅱ真言宗の開祖）が天女のお告げで江の島に堂塔を建て、護摩をたきながら修業をしていました。その折、護摩をたいた灰で弁財天の像を三体つくられ、「江の島」と「琵琶湖の竹生島」、「足利の大勝院」に一体ずつ安置しました。

ところが、足利の弁天像は間もなく行方不明になってしまいましたので、これを聞かれた大師が、布教の旅を続けながら像を捜しに足利へやってきました。山伝いに行く途中、上の方からとてもよいかがりが流れてきました。「はて、いったい何のかおりだろう」不審に思った大師が、そのかおりにひかれて上の方に上ってみると、草の芳香とわかり「これ

「美人弁天のいわれ」を求めて 弘法大師の伝説がある



弘法大師の伝説を残す「名草の弁天さま」

は名草だめいそう」といわれたそうで、それが転じて「名草なぐさ」の名前が生まれたともいいます。

なおも進んでいくと、「白い大蛇」に出合いました。大師の姿を見ると大蛇はとぐろを解き、草をわけながら動きだしました。

大師は「これは弁財天のお使いに違いあるまい。道案内をしてくれるのだろう」と、あとをつけていきますと、やがて大きな岩の前に出ました。すると大蛇は、「私の役目は終わりました」とでもいいたそうに、岩の穴の中にはいつてしまいました。

そこで大師は岩の前にすわり、経文を唱えて「弁財天を勧請かんじょうし」、前に祠を建てました。これが名草の「弁天さま」の始まりです。

「美人弁天のいわれ」を求めて 弘法大師の伝説がある

村人を驚かせまいという配慮からでしょうか。白い大蛇はその後、姿を見せないそうです。

弁天さまは、明治元年の神仏分離令で巖島神社と改称、祭神も、弁財天から市杵島姫命いちきしまひめのみことと変わり、昭和四十年に社殿や神楽殿を新築し、鳥居を建立するなど、その面目を一新しました。境内は全山、花崗岩におおわれ、石割楓、お供え石、弁慶手割り石、お舟石などの巨石奇石があります』

「名草弁天」には尊い清水が流れています。水は「弁天さまのみころ」です。

本城二丁目の「巖島神社」は昔から、通称「明石弁天祀」といわれ、昔この里に清水が湧く池があったということです。水にゆかりの深い神として奉祀したと伝えられています。

「美人弁天」は女性に親しみやすく、心のやさしい「こころ美人」の

「美人弁天のいわれ」を求めて 源氏にまつわる「明石姫」に喜びがこみあげる

願いを込めて、愛称にしました。これも「足利の伝説」（台 一雄著）の中の第二十九話に「明石姫」――義家にまつわる伝説――があります。その中に「目もさめるような美人」の物語があるのです。

次に、「明石姫」のいわれを語っていきたいと思います。

「美人弁天のいわれ」を求めて

――源氏にまつわる「明石姫」に喜びがこみあげる――

「美人弁天のいわれ」をつくるにあたり、本城二丁目の「厳島神社」は、昔から「明石弁天祠」といわれ、明石とは何かと調べていた所、「足利の伝説」（台 一雄著）に「明石姫」を知ることになりました。

『一〇五六年頃、勅命により源頼義父子が、途中足利の堀込に陣をしいたとき、戦勝を祈願して山城国（京都府）男山八幡宮を勧請して創建したのが「八幡町の八幡様」と伝えられています。

「美人弁天のいわれ」を求めて 源氏にまつわる「明石姫」に喜びがこみあげる

その時、源八幡太郎義家は城主足利太夫基綱の館に滞在することになり、接待に出たのが基綱の娘の明石姫です。

すっかり成人して目もさめるような美人になっていました。「こんなに美しくなつて……」武将とはいえ義家も驚きました。明石姫も、めざましい武功をあげたりりしい若武者、義家にあこがれの気持ちをいだいたとしても当然です。いつしか深く愛し合うようになりました。やがて明石姫は懐妊しました。

奥羽から戦乱の飛報が来しました。これを平定するのが、陸奥守兼鎮守府將軍に任じられていた源義家です。総大将義家の両眼が急に痛みだし、手当てのかいなく、腫れあがってしまいました。明石姫はもちろん、父基綱も、義家の家来たちも心配しました。両眼が見えなくては戦いができません。そんなある夜、義家は、「天王本地薬師如来」に、「三日三晩参籠さんろうするように」との夢のお告げを受けました。

「美人弁天のいわれ」を求めて 源氏にまつわる「明石姫」に喜びがこみあげる

明石姫にこのことを話し、お堂にこもりました。満願の三日目の夜。腫れが引き、両眼が治ったのです。義家は、薬師如来に感謝とお礼と共に、戦勝も祈願してお堂から出ました。明石姫や大勢の家来たちが、一心に祈っていたのです。力強く告げる義家の勇姿に、明石姫はうれし涙にくれています。そして勇躍出陣した義家は、大きな手柄をたて、見事に戦乱を鎮定しました。

出征中に生まれたのは「玉のような男の子」でした。八雲神社の略誌には源氏の長者源義家公を父とし、藤原秀郷公の末裔まつえいにあたる、明石姫を母として生まれた男児こそ、足利と新田両家の先祖として足利に居を構えた義国公である。と書かれています。』

明石姫は、心のやさしい、目も覚めるような「美人」でした。夫義家の「健康」を、命をかけて守ったのです。「明石弁天祠」についての「伝説や伝承」はないが、のちに神社を守っていた人たちが明石姫を知

「美人弁天のいわれ」を求めて 弁天様は運の強い開運の神様

り、イメージ化された「明石」の名をつけたのではないかと思うのです。昔から誰でも「健康を願い」「長命を祝い」「美しい人生」を歩みたいと思うものです。

「健康と長命と美」は「美人弁天」の三願です。「美人弁天」は運の強い神様です。美人弁天のみこころが「健康と長命と美」、まさに女性の宝を護ってくれることでしょう。そのような願いを込めて「美人証明」を多くの人に差し上げているのです。

「美人弁天のいわれ」を求めて

― 弁天様は運の強い開運の神様 ―

本城二丁目「厳島神社・明石弁天」そして「美人弁天」は運の強い神様です。

厳島神社は古くから「長尾の七弁天」の一つとして伝えられています。

「美人弁天のいわれ」を求めて 弁天様は運の強い開運の神様

戦国時代には足利長尾の初代長尾景人が文正元年（一四六六年）から、六代目まで一二〇年余年、足利の地を統治していました。記録によると、寛政五年（一七九三年）の創建といわれています。足利市の中でも歴史のある「本城巖島神社・明石弁財天」です。

昭和二十年、終戦間際に「B29」の焼夷弾を受け、社務所は焼失してしまいましたが、運よく本殿は残りました。また平成十五年に、再び火災に遭い、社務所が焼失しましたが、運よく本殿には移りませんでした。運の強い巖島神社の御祭神である「市杵島姫命」が守ってくれたのではないのでしょうか！



創建当時の姿を残す「本城巖島神社・明石弁財天」本殿

「美人弁天のいわれ」を求めて 弁天様は運の強い開運の神様

その後、町内の人たちが心を合わせ、
「本城二丁目自治会館・厳島神社
社務所」が新たに建てられました。町
内が一つとなり、まさに逆境の時に立
ち向かったのです。

その時、厳島神社を守って行こうと
いう機運が高まりました。「夢と希望をもつて」、神社を進化させること
が大事なことかと思っています。

「美人弁天」は平成十八年十二月六日に厳島神社に奉納されました。

『美人弁天』制作までのエピソード

美人弁天は、有名な熊谷市野口石材店の「現代の名工」といわれる野
口大作氏（故人）と、野口孝氏の制作によるものです。「美人弁財天・



奉納された「美人弁天」

「美人弁天のいわれ」を求めて 弁天様は運の強い開運の神様



美人弁天が鎮座する「六角の宮」

三体」を創作的に、まさに「美人弁天」を制作されたのです。

「六角の宮」は、自然の中の蜂の巣や、亀の甲羅をイメージし、美人弁天を守り、広げ、賑わいをもつように、創意と工夫で建築されました。

六角の形は、エネルギーを引き出すパワーがあるといわれています。

副碑の「心のやさしい美人弁天」の書は、日展の審査員をされ、元大東文化大学名誉教授で、日本有数の書家である今は亡き「白汀・野口林造氏」が書かれたもので貴重なものです。

このような制作者の方々のおかげで「親しみのある、身近な存在の美人弁天」になりました。

「美人の国・足利」は「美人のもと」 それは「美人証明」です

四、「美人の国・足利」は「美人のもと」

—それは「美人証明」です—

女性にとって「美」とは、「生きていくこと」なのです。「美人の国・足利」は、訪れる女性がみんな美人になる「美の世界」です。美とは、女性たちを映し出す鏡です。鏡は女性の「美人のもと」「心の鏡」でもあります。「美人弁天」を訪れると、女性のありのままの心の優しさに満ちた姿が鏡に映し出され、鏡の中で自分の世界が広がるようです。鏡と自分に対話し、美を学んでいきます。

鏡を見ながら、今年を振り返ってみる。「二十代」の私は、今年はどうだったかな！「二十代は美しく」とはいえ、半ばなかになると、「お肌の曲がり角」ともいわれ、「美人証明」に感謝します。「五十代」の母は、「五十代は豊かに」とはいえ、「心身の変化」への対応が何よりも大事で

「美人の国・足利」は「美人のもと」 それは「美人証明」です



絵馬に女性の願いを込めて…

す。「美人証明」を見つめ直します。美人証明は、「美人のもと」です。心身共に癒され、「健康・長命・美」が叶えられるといわれています。

美人証明は、「あなたは心柔らかく品性のある美人である」ことを証明いたします。自分の人生の主役は自分。自分の人生を変えられるのも自分です。「仕事も人生も」この時代に、生きていることを知り、「心の鏡」と向かい合うことが大事のようです。「鏡よ、鏡よ、鏡さん、私に何かおしえてね!」と。

「過去と他人は変えられない。自分と未来は変えられる」。女性の「美人のもと」は、^{よわい}年齢と共に、油断すると年々減っ

「美人の国・足利」は「美人のもと」 それは「美人証明」です

ていくのです。鏡がおしえてくれる。「健康と長命と美」である自分の姿を、「気づかせてくれる。感じさせてくれる」のです。人生の「幸せ美人」になるために、「自分大好き」になりましょう。



「美人証明」を手に微笑む「幸せ美人」

「美人証明」は「美人のもと」。

「美人証明」は「美人のもと」。

誕生日や、記念日には「美人弁天」をお参りして、

「美人証明」を新しくしましょう。

そして、新しい自分との出会いを発見しましょう。

「美人の国・美人弁天」より、あなたへ、心をこめて
差し上げています。

美人辨天・美人証明

美と健康・長命の三願を叶う

発行 日 平成二十四年一月一日

編集・発行 本城二丁目まちおこしの会

事務局／株式会社プロス

栃木県足利市本城二丁目一九〇一―一〇
電話 〇二八四―四一―一三八二

印刷・製本 足利印刷株式会社

美人証明を出す 日本で
「たった一つ」の神社です

あけし ぺん てん いつくしま じん じゃ
明石弁天 厳島神社

栃木県足利市本城2丁目1860

美人弁天.com

Bijinbenten.com